

デジタル・ネットワーク上の政治言論に対するレトリックの主要概念

畑山浩昭

政治言論の場

レトリック研究において政治言論は主要なテーマのひとつである。一般的な定義として「政治」とは「人間集団における秩序の形成と解体をめぐる、人が他者に対して、また他者と共に行う営み」であり、「言論」とは「言語や文章によって思想を発表して論ずること」である^①。したがって政治言論とは、言論により思想を表現し論ずることによって他者の思考や行動に影響を与え、人間社会の秩序を形成もしくは解体することを促す営みであるといえる。ディスコースの説得性とオーディエンスの思考や行動の変化を研究テーマとするレトリックにとって、政治言論はいつの時代でも重要な研究課題である。

最近の日本社会においては、政治言論の場が大きく変化している。政治的な言論は街頭演説や講演会、政見放送といった従来の方法だけではなく、デジタル・メディアとネットワークを利用した方法も導入されるようになり、かなり多種多様な場が整えられてきている。デジタル・コンテンツに対応する機器やメディア制作用のソフトウェアが開発され、言論者個人が自由に発信できるようになった。単に、演説や講演を録画してインターネット上で公開するだけではなく、ストリーミングによる同時配信や相互性のあるウェブ上の会議、ソーシャル・ネットワーキング・サービスを利用した発信等も増えてきた。また、文字や画像を中心とした発信方法も有効で、政治的言論の展開を意図したブログや言論サイトも数多く公開されている。

言論の場が変化することに伴い、当然、オーディエンスへの影響のあり方も変わる。街頭演説や講演会などは「その場、その時」という言論の空間や時間が実感できるが、デジタル・ネットワーク上では、言論の場所や時間が交差する上、他者の見解や意見が入り交じることも可能であり、「その場、その時」という単独の言論として取り扱うことが難しくなる。特に、政治家など社会を先導する立場の人々の政治言論は、市民としてのオーディエンスの思考や行動に影響を与えるので、現代的なレトリック研究の立場から、この点について考察することが必要である。民主的な社会において人間集団の代表となる人物の言論を判断することは重要な課題である。このエッセイでは、デジタル・ネットワーク上の政治言論に対するレトリックの主要概念を選別し再考することによって、オーディエンス側の理解や思考、判断の手助けとなるような枠組みを描いてみたい。

「知」と「語」

デジタル・ネットワーク上における政治言論の場とレトリックについて考えることは現代的な問いであるが、レトリックの原点であるプラトンの論説を土台とすることは、大枠を考えるためにかなり有効

である。なぜならプラトンは、言論と政治の本質的、基本的な問題について複数の著作の中で論じており、レトリック学や政治学の分野において現在でも参照されるからである。特に『プロタゴラス』『ゴルギアス』は関係が深い²⁾。これらの本の表題となっているプロタゴラスやゴルギアスは、紀元前のアテナイ (Athens) 社会に生きた著名なソフィストである。ソフィストとは弁論家であり、弁論を教える教師である。ソフィスト達は、民主的な社会で身を立てるための弁論術を教える一方、国家と社会の危機を弁論で救い、導くなど、かなり政治的な活動も行っていた。

このような著作の中でプラトンが特に問題にしたことは「知識と言論」の関係である。プラトンにとって「知っていること」と「それについて語ること」は非常に重要な問題で、内容と形式の一致は哲学のテーマでもあった。もちろん人間の能力には限界があるので、人間が「知り得ること」にも限りがある。しかし、プラトンは人間が知に到達するプロセスを考えた人であり、対話による弁証の方法は知を得るための技術であった。弁証法のプロセスでは注意深くことばを使うが、プラトンにとって「知」と「語」、つまり、知っていることと語ることは、まさしく一体のものであった。

ところがソフィスト達が説得術として教えていた弁論術は、プラトンが納得できるものではなかった。というのも、彼らの弁論や弁論術は、必ずしも知を土台としているわけではなく、どちらかというところ、大勢の人々にとって「真実と思われるもの、真理に見えるもの」に訴える方法であったからである。人々を説得するために、どのような物事が説得的かを集約し、体系化して、ソフィスト達は教えていたのであるが、もしそれが知識に基づいた言論とならないのであれば、単なる虚言に他ならない。ましてやそのようなソフィスト達が、国家や社会のあり方をその説得的な言説によって動かすならば、知識に基づかない社会構築となるので、その危険性のほうがプラトンにとっては大問題だったのである。

プラトンが追求した「知っていること」と「それについて語ること」の問題提起は、現代のデジタル・ネットワーク社会上の政治言論を考察する上でも有効であり、新鮮である。政治言論を営む典型的な職業は政治家であるが、彼らもデジタル・メディアを使った新しい方法で自らの政治信条や政治活動を発信するようになった。特に、相互的なコミュニケーションを可能にするシステムが好まれるようになり、ブログやソーシャル・ネットワーキング・サービスが多用されるようになった。しかし、この新しい言論の場は政治家にとって難しい局面も創出している。政治家は、様々な物事について議論をしなければならぬが、その分野の専門家であるわけではない。つまり、政策や方向性を語らなければならないが、その内容に伴う深い知識や経験を有するとは限らない。

以前は、ひとつの言論における「知」と「語」の問題は、言論者個人の問題であった。しかし近年、デジタル・ネットワーク上に言論の場を移した結果、政治家が表明した言説の内容について、いわゆる「専門家」が介入し、批評、評論する機会が多くなった。また、その議論をネットワーク上で誰でも視聴、閲覧することが可能となった。プラトンが問題にしていた「知に基づく言論」の問題が、専門家による介入により極端な形で露呈される空間が構築されている。例えば、政治家が自分のブログであるテーマについて見解と政策を載せたとする。そのページのコメント欄、または、他のページにリンクさせる形で、その内容についてその領域の専門家が専門的な知識に基づいて見解を述べる。そのようなやり取りに一般的な読者が更なるコメントを追記していくという構造である。

政治家の言論が、経済政策であれ、環境問題であれ、国際関係であれ、その領域の専門家も政治家の

言論の「知に基づく」部分において専門的な見解をデジタル・ネットワーク上に公開するので、言論そのものは精度を増していくことになる。しかし、政治言論の主体そのものは弱体化する。つまり、政治家自身の言論者としてのエトスは失われていく。このような言論空間では、「誰が」「何を」「どのように」語っているかの把握が難しくなるが、オーディエンスが政治言論を営む個人と、その人の言論を理解し評価する際には、まず、論者個人の「知っていること」と「語っていること」を基本的な判断対象とすることが有効である。そして、デジタル・ネットワーク上の政治言論が、第三者的な言論の介入を容易に許す空間であったとしても、その個別の議論の全体性と、複数のディスコースの混合・混成によって構築、更新される新たな意味の発生に注意を向けながら、「知」と「語」がまさに合致していく道筋を見極めていくことが肝要である。

「テキスト」と「コンテキスト」

デジタル・ネットワーク上のコミュニケーションでは、「テキスト」と「コンテキスト」が時間や場所という従来の概念を離れて機能することがある。テキストとは、一般的にまとまりのある記述全体を指す。コンテキストとは、(1) テキスト内部の文脈、(2) 発話場面としての文脈、(3) 社会的広がりとしての文脈、の3つがあるとされている^③。デジタル・ネットワーク上のコミュニケーションでは、これらの種類のコンテキストが巧妙な形でテキストの意味に影響を与える。

まず、テキストの引用や抜粋、編集等が容易に行える言論空間では、オリジナル・テキスト内部の文脈を失うことがある。テキストを最初から最後まで読んでいく際に、既読・既知の情報が、後に続く語や文の理解に影響を与えるが、このプロセスがデジタル・ネットワーク上では崩壊しやすい。ひとつの政治言論がテキストとして、つまり、まとまりを有する全体としての記述として発信されたとしても、部分的な引用や抜粋、要約や編集がなされ、大量に交換されていく中で、一人の読者がどのバージョンから読み始めるかによって、理解が異なる可能性が高いからである。したがって、どのようなテキストであっても、オリジナルの全体性を基本とすることを常に意識しておかなければならず、かつ、オリジナル・テキストの内部におけるコンテキストをも意識して、意味を抽出することが正しい理解につながる。

また、発話場面という文脈についても注意が必要である。ある特定の発話が理解されるとき、その場の状況や経緯、時間や場所が、その意味に影響を与える。しかし、デジタル・ネットワーク上で、画像や映像を含めたマルチメディアを利用すると、実際の発話の時間や場所から離れていても、「その場」「その時」に近い状況を視聴覚的に再現することができる。オーディエンスは感覚的にその状況を疑似体験する。ただし、マルチメディアによるテキストの再構築はあくまでも編集を加えたテキストの試みであり、実際の発話場面ではない。したがって、その場その時のコンテキストと、デジタル・ネットワーク上に再構築された場面のコンテキストは全く異なるのである。テキストの意味合いも異なる結果となる。

さらに、デジタル・ネットワーク上での政治言論は瞬時に様々な境界を超えるので、テキストはいとも簡単に社会文化的なコンテキストから逸脱する。本来であれば、テキストが発せられた社会文化的価

値の中における解釈を試みるのが適切であるが、社会文化的な背景をネットワーク上で飛び出すとなると、様々な境界を越えて解釈の可能性も多様になり、一義的な意味の保持はますます難しくなる。したがって、オーディエンスは、「どのような社会文化的コンテキストを前提としたものであるか」を意識しなければならない。いわば、テキストを本来のコンテキストに戻す仕事が必要となる。

「過去」「現在」「未来」

デジタル・ネットワーク上では、過去の再現や未来の創造が、実際の記録映像や立体的に作成された画像等を利用して構築できるため、実感としての時間の区別が難しくなる。例えば、過去の出来事の解釈であれば、その時の象徴的な写真や映像を選択し、秩序づけて提示し、その意味を産出する。まだ起こっていない未来であれば、デジタル技術を駆使しながらできるだけイメージできる姿に作り上げ、まるで既存の現実であるかのように意味づける。一般的な政治言論においては、「過去の解釈」「現在の問題の共有」「あるべき未来の形」を示し、改革改善を訴える場合が多いが、例えば、酷い惨状を画像や映像で示し、問題を象徴的な図や写真で示し、未来の姿をアニメーションで見せるなど、より視覚的、感性的に訴える手法が、デジタル・ネットワーク技術の発展とともに増えてきている。

時間と言論に関する問題については、アリストテレスのレトリック論ですでに指摘されていることである。アリストテレスの分類によると、弁論術における言論の種類は必然的に三つであり、それぞれ、審議的なもの、法廷用のもの、演示的なものとしている^④。これらの三つのタイプは、時間と密接に関係している。審議的な言論は未来のあり方を論じ、法廷的な言論は過去の事実を論じ、審議的な言論は現在の状況の解釈を論じる。つまり、過去の事実を正しく再現し、現在の状況を正確に把握し、あるべき未来を描き出すという言論のあり方を講じているのである。

アリストテレスにとっては、起こったこととしての事実、現在の状況の把握と共有、そして未来の姿という区別が言論上非常に重要で、それぞれの目的にあった言論のあり方を説いている。過去のことについては起こった事実を再現する技術が必要であり、現在のことについては状況や人々の心情を適切な言葉で表象することが大事であり、まだ起こっていない未来についてはその姿を視覚的に描くような創造的表現が要求される。特に政治的言論は、審議弁論、つまり、未来の姿を説くような言論が中心になる。

アリストテレスの理論と比較すると、デジタル・ネットワーク上における現在の政治言論の問題点が浮き彫りになる。マルチメディアを利用した言論が増えるにつれ、画像や映像、音声など視聴覚的な媒体が力を持つので、テキストが取り扱う「過去」「現在」「未来」の論理的な関係や、それぞれの時を対称にした言説間の差異が希薄になるのである。言論が、より画像的、映像的表象による認識を土台としたものに傾向するようになり、過去のことも、未来のことも、より現実的な画像や映像で表されるので、現在との差異を感じられなくなるのである。したがって、オーディエンスの心構えとしては、過去と現在と未来の区別が見えにくくなる中で、どのような過去の解釈に基づき、現在の問題を何であるかを共有し、どのような未来を構築したいのかを見極めながら、個別の政治言論に向き合うことが重要である。

「関係性」

レトリック研究でよく聞かれる「ロゴス」とは、「ことばと論理」をひとつの意味・概念として表す語である。言語を通して表された物事の理である。何かを言葉で表すということは、必ず「命題」の形をとる。つまり、「AはBである」または「CはDする」というように、二つ以上の概念を組み合わせるときに命題や文の形をとり、何かを言い表したということになる。命題や文の形をとるということは、何かと何かを関係づけるということであり、関係づけることによって人間は物事を理解するということである。

言論は「関係づけること」を積み上げることによって、より大きな「理解」に到達することができるが、逆に考えると、どのような関係づけによって物事が組み合わせられているかを見極めることが、言論を理解し判断する上で非常に重要である。論者は自分の議論を構築するために様々な関係づけを行う。例えば「定義」「比較」「対称」「類似」「因果」「相関」などは、すべて物事を関係づけるための手法となる。政治言論においても例外ではなく、このような関係づけによって言論が構築される。

デジタル・ネットワーク上の政治言論においては、関係づけのためのリソースが多様な質と膨大な量を伴って存在するため、ネットワーク上で参照可能な情報として自由自在に議論に組み入れられることになる。従来は、言論者の「本文」の中でオーディエンスが納得するまで書き表さなければならなかったことも、デジタル・ネットワーク上での参照が容易になった言論空間においては、その状況を前提として言論が進むこともある。つまり、オーディエンスの参照する行為を見込んで、テキストを構築するということである。これは、個々の政治言論を理解するための情報が、言論そのものに含まれてないことを示唆する。

また、リソースとして利用できる情報が様々な境界を越えて存在するため、その質を見極めたり、量をコントロールしたりする作業に一定の労力を要求するようになる。政治家が構築している言論の中に見いだせる様々な命題や命題間の関係性が、どの程度信頼に値するものなのかを見極めるために、オーディエンスが自ら積極的に情報を集める努力が必要になるのである。このように考えると、デジタル・ネットワークの構造そのものが、ロゴスの構築課程において、オーディエンスを巻き込む形の言論空間を作り出しているということになる。従ってオーディエンスは、政治言論の中に見いだせる様々な関係性を吟味することに、ある程度の意識を働かせなければならない。語と語、文と文、部分と部分の関係が納得できるロゴスであるかどうか、関係そのものが、特定の力を持ち得るかどうかなどを判断するのである。関係性の分析が、政治言論を理解し、判断するためのひとつの方法となる。

解釈の枠組み

政治と言論について文頭の定義に戻ると、政治は秩序を形成したり解体したりする営みであり、その原動力となるのが人々に訴える説得的な政治言論である。したがって、国や社会、組織等の人間集団を導く人たちの言論は、本質的には政治言論である。民主的な社会に生きる市民は、プラトンがそうであ

ったように、個々の政治言論を見極めながら判断することになるが、デジタル・ネットワーク上で行われる政治言論に対するためには、それなりの対応策が必要である。説得的な言論に関する研究は、レトリック学でなされてきたので、基本的な理論体系はあるものの、デジタル・ネットワークという新しい言論空間に対応するために、理論上の更新が必要である。特に、オーディエンスが言論を理解し、判断するための枠組みの整備が課題である。

拙稿では、レトリック論の中から本課題に対応する概念を選別した。「知」と「語」、「テキスト」と「コンテキスト」、「過去」「現在」「未来」、「関係性」である。これらの概念は新しい術語ではないが、デジタル・ネットワークという新しい環境下においてなされる政治言論を理解、判断するために、オーディエンスが「枠組み」として使える実用的な簡易体系である。この枠組みを利用して、個々の政治言論の理解と判断が適切に行われることは、政治への関与の質が向上し、結果として良い社会の構築につながるのである。

① 広辞苑 第6版、岩波書店、2012年。

② プラトン、『プロタゴラス』（藤沢令夫訳）、岩波文庫、2012年。『ゴルギアス』（加来彰俊訳）、岩波文庫、2011。この他にも、『パイドロス』『メノン』『テアイテトス』（すべて岩波文庫）も部分的に関係する。

③ 脇坂豊、他、『レトリック小辞典』、同学社、2002年、57頁。

④ アリストテレス、『弁論術』（戸塚七郎訳）、岩波文庫、2011年、45頁。